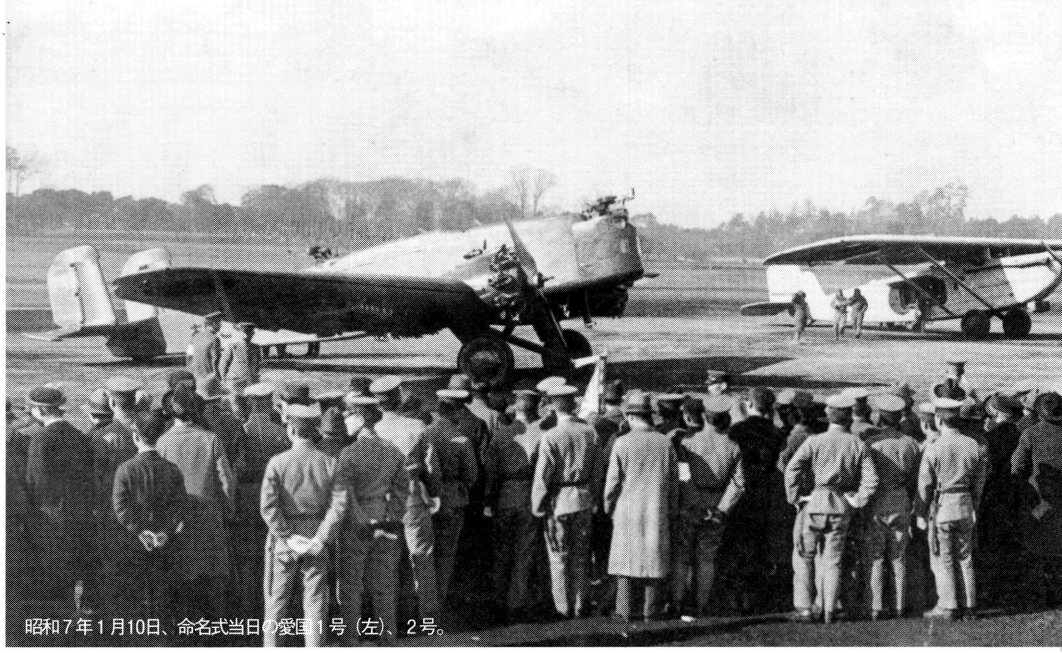
陸軍愛国号献納機調査報告

その1【愛国1号、2号】

横川裕一



昭和7年1月10日、命名式当日の愛国1号（左）、2号。

はじめに

戦前から終戦までにかけて、当時の植民地を含めた日本国内において、鉄カブトから鉄砲、高射砲、装甲車、戦車、はては艦船まで、一般市民や企業から軍へのさまざまな献納が行なわれた。

その1つである軍用機献納は昭和7(1932)年1月の陸軍愛国1号、2号から始まり、少し遅れて始まった海軍報国号とともに瞬く間に全国的な運動となって、昭和20年の春ごろまで続いた。現時点では、愛国7169号が判明している愛国号番号のもっとも大きい番号である。

残念なことに、罹災や敗戦時の混乱、さらには戦争協力に結びつくといった意識からか、これら献納機の記録はまとまったかたちではほとんど残されていない。戦後刊行の県史や市史、社史などでもそのことを記載していない例が多い。近年はこの傾向が幾分変わってきたが、記載のない例が多いのは事実である。

来年は、愛国1号の献納から80周年となり、それにちなんで、ここに中間発表させていただくものである。なお、本調査は、当時の軍用機献納運動を美化するものでも弾劾するものでもなく、ただ航空史の一断片を集めているに過ぎない。公開させていただくことで、各位のご協力を得てより1機でも多く判明させることができれば、そして、いまとなっては窺い知れない時代の熱気が生み出した軍用機献納運動とは何であったのかを知り得たらと、願うものである。

また、海軍報国号については横井忠俊氏が『航空情報』1987年2、3、12月号に発表されておられるので、ここでは陸軍愛国号献納機について対象を絞っている。

軍用機献納運動とは

昭和6年（1931年）9月に始まった満洲事変は、それまでの戦争とは異なって動員規模が大きく、一般市民にも出征や戦傷・戦死が身近なものに感じられるものとなった。人びとの反応はお守りなどによる近親者の無事祈願から始まり、慰問袋や献金というかたちになって各地で発展していく。それまでも献金はあったが、軍費の一部に組み込まれてしまい、献金者の意図・趣旨が見えるかたちではなかった。

一方、国民からというかたちや大義名分で兵器充実を図りたい陸軍もこの状況を好ましく思っておらず、強引な閣議決定を経て、用途指定寄付という道を作り出す。この道の1つとして、軍用機献納があった。

その献納者は県民、市町村区民、一企業や同業組合、個人の献金から、大人のみならず大学生や小中学生、女学生の小遣いを倹約した献金、さらには新聞社の提唱で献金したものまで多種多様な献納が行なわれた。

献金と言えば聞こえはいいが、県民号などでは県下市町村に献金が強制された例が見受けられる。たとえば、昭和7年の新潟県号戦闘機2機（合計約15万円余）の場合では、各市町村に献金目標額が割り振られ、命名式後に未払い市町村へ県から催促が行なわれている。宮城県民号(軽爆2機）の場合でも同様で、一部の自治体が「負担能力を超える」とひと悶着あったようだ。翌8年の滋賀県号でも、1人10銭以上の寄付用奉公袋が県民に配布されている。

つまり、軍用機という高額さ故に純粋な民間募金運動だけでは無理で、在郷軍人会や県などが主導するかたち、すなわち、きわめて初期の段階から、強制寄付的な性格を軍用機献納運動は有していたことが窺える。

今回は、その先駆けとなった愛国1号、2号を採り上げる。

愛国1号、2号

昭和7年に献納された愛国1号および2号は、前年秋ごろに始まった東京市目黒駒場青年団の醵金運動などの動きに陸軍が歩調を合わせ、航空技術奨励のために購入が決まった機体である。

機種はユンカースK37双発機（三菱航空機がスウェーデンから輸入、旧登

録記号SE-ABP）と、ドルニエ・メールクール（川崎造船飛行機工場【当時】が昭和３年に輸入し朝日新聞に貸与、登録記号J-BAFH）改造の患者輸送機となり、陸軍内での協議により「義勇号」と決まった。

が、このことを掴んだ新聞社が既存であった海防義会からの「義勇号」と紛らわしいこと、国民の熱誠を伝えにくい名前だとして、愛国献金からとって「愛国号」と独断先行発表し、陸軍がそれに同意したかたちで「愛国号」に変更となった。

両機の購入費は、愛国１号が装備費込みで10万円、愛国２号は機体分５万円を川崎造船側が寄付したかたちとなり、BMWエンジン代金と装備費のみの合計12万円。この金額は、寄付金の資金プールとしても使用されていた学芸技術奨励金（大正13年に設立）から出されることになった。

愛国１号、２号の命名式

昭和７年１月10日、東京は代々木練兵場で７万人（場外観衆を含めて10万とも）の観衆を集めて、両機の命名式が盛大に催された（タイトル写真参照）。式は、靖国神社宮司の修祓、陸軍航空本部長の経過報告、荒木陸相の命名書読み上げと続き、逓信大臣からの祝辞、玉串奉奠が行なわれた。そのときの命名書は、次である。

命名書

茲に国民報效憂国の熱誠に依る陸軍技芸、技術奨励の寄付金を以って建造されたる爆撃機を愛国第一號、輸送用飛行機を愛国第二號とす

陸軍大臣　荒木 貞男

命名式の模様はNHKラジオで生中継され、所沢と下志津の両陸軍飛行学校からの陸軍機や民間機ら計40数機が上空を舞った。加えて、甲式四型戦闘機２機と九一式戦闘機２機による、アクロバット飛行も披露された。

愛国１号は緑と茶の迷彩を身にまとい、胴体と主翼上下面に黒で「あいこく.1」を、方向舵に「愛國號」「昭和７年１月」を白で標記していた。

胴体に「あいこく．１」と書いた愛国１号（ユンカースK37）。

胴体に「あいこく　２」と書いた愛国２号（ドルニエ・メールクール）。

一方の愛国２号は、コバルトブルー（グリーニッシュ・コバルトと表現している新聞記事がある）の装いに、胴体と主翼上下面に「あいこく２」を白字で記入した。

蛇足だが、両機ともひらがなの「あいこく」が、「あいにく」と読めたという笑い話がある。

愛国１号、２号の足取り

愛国１号、２号にはプロパガンダの意味合いが多分に含まれており、両機は任地である満洲へ赴く途中、意識的に各地を経由している。その足取りを追ってみよう。

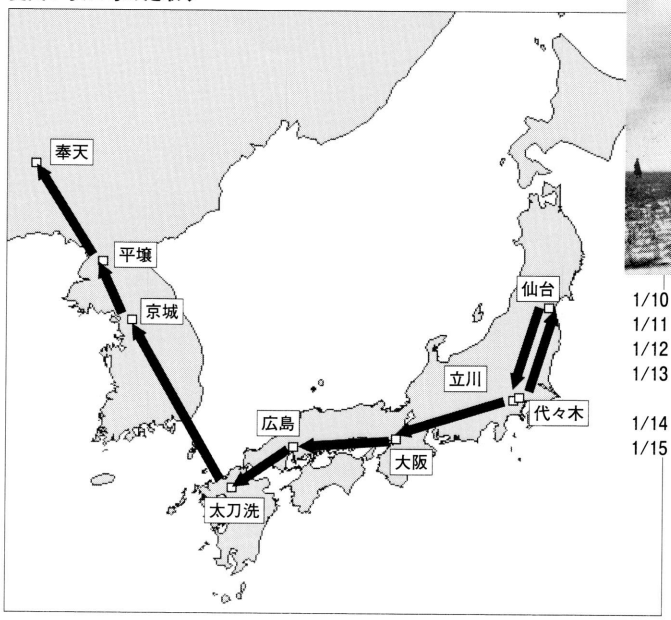
命名式において機体の一部を損傷した愛国１号機は、整備のため立川に戻ったが、２号機は予定どおり、謝恩飛行のため仙台に向かう。

式後ただちに代々木を出発した２号機は宇都宮、白河の上空を経て、仙台の宮城野飛行場に到着。その夜の歓迎会および翌11日の歓送会を終えて、福島、郡山、水戸、土浦の上空を通過しつつ、立川に戻った。

翌12日、修理なった１号機を加えた両機は約1,000名の地元児童による日の丸振りの見送りを受け、10:50に立川を出発。加藤尹義少佐を指揮官とした一行は、愛国１号機の正操縦に航空本部の加藤俊雄大尉、恩田源蔵大尉が副操縦としてあたり、愛国２号機には加藤尹義少佐、川原大尉（正操縦）、松村曹長（副操縦）、関野雇員（後の航研機で有名）などが搭乗していた。

立川を発った両機は途中の豊橋、名古屋、彦根、京都にメッセージの入った通信筒を投下しながら大阪（城東練

愛国1号、2号の足取り



奉天到着時における愛国1号、2号。

1/10　代々木～宇都宮、白河、福島～仙台（愛国2号機のみ）
1/11　仙台～立川（愛国2号機のみ）
1/12　立川～豊橋、大津、京都～大阪
1/13　大阪～神戸、姫路、岡山、尾道～広島～徳山、下関、門司、小倉、福岡～太刀洗
1/14　太刀洗～京城
1/15　京城～平壌～奉天

兵場）へ到着し1泊。翌13日も神戸、姫路、岡山、尾道へメッセージを投下しつつ、昼過ぎに広島に着陸し、休む間もなく、悪天候のなか午後2時すぎに同地を出発した。徳山、山口、下関、門司、小倉、福岡の上空を経た両機は、太刀洗の飛行第4連隊機に誘導され、15:50に太刀洗に到着した。

快晴となった14日は午前中に太刀洗を出発し、久留米と福岡の上空を経て朝鮮海峡を横断、14:00すぎに京城（ソウル）の汝矣飛行場へ到着。最終日の15日は、8：00に京城を発ち、いったん平壌に立ち寄った後の12:00すぎ、最終目的地である満洲の奉天にその姿を現わした。当日の奉天は零下15℃の寒い日だったが、700人を超す市民・児童が飛行場に集まって、両機の到着を歓迎した。

愛国1号、2号からのメッセージ

両愛国号から投下されたメッセージは、上空通過地関係者（地方師団長、県知事、市長など）宛てのものと、市民に宛てた3色（5色とも）のビラのものがあった。長文だが、神戸駅前に投下されたビラを次に示す。

満蒙問題は将に結実期に入らんとすると共に諸外国との関係いよいよ繁きを加え、なお2月初旬よりは台府おいて軍縮会議開催を見んとし国家の今後はますます多事多難にして国民の一致緊張を要する、まことに将来において切実なるものがあります。この秋に当り国民愛国精神の表徴とも称すべき愛国号は今や将にその期待に副わんとして満洲に向い鵬翼を張らんとしつつあるのであります。一月十日東京代々木原頭において畏くも閑院梨本両宮殿下台臨のもとに荘重なる命名式を挙行され多数官民の熱烈なる歓送をうけて恐縮しつつ渡満の途上只今当地を通過いたします。この飛行機の誕生いたしましたことについては勿論、渡満に対する当地各位の熱烈なる愛国熱によって盛大なる御後援をうけ誠に感謝の至りに堪えません。この赤誠あふるる国民各位の御後援に対してはただただ本機は使命の任務に向かって邁進しもって各位の御期待に副わんとするのであります。今や寒風凛烈国家多端の折貴市上空より遥かに閣下および県市民各位の御隆昌をお祈りいたします。

愛国1号、2号のその後

結果的には陸軍の狙いどおり、両機の命名式やその後の報道を契機として第1次献納ブームが起る。当時の児童雑誌『少年倶楽部』（昭和7年4月号）の豪華付録として愛国1号のペーパークラフトモデルまでも登場しており、その盛り上がりの一端が窺い知れる。

関東軍飛行隊に配備された愛国1号は、満洲に派遣されていた飛行第7大隊第3中隊に2月1日付で編入され、敵の地上砲火を浴びながらもその高性能ぶりを発揮して爆撃任務に奮闘していた。尾翼の弾痕の有名な写真も、この時期に撮影されていてる。

が、6月16日、エンジン故障から不時着大破。これによって内地に環送と決まった愛国1号は、東京九段の国防館（現・靖国会館）に展示された。雑誌『空』（昭和17年10月号）の読者投稿欄に、靖国神社の遊就館大広間における見学記が載っており、この時期までは展示されていたようだ（終戦時に破壊されたという伝聞もあるが、詳細は不明）。

一方の愛国2号は、奉天―ハルピン間などで戦傷者輸送や要員輸送に従事するも、その評判は芳しくなかった。昭和7年4月下旬に関東軍参謀部の発した電報に「交通不便なる地方における戦病傷者、とくに重傷者の空中輸送のため愛国2号機の性能は適当ならざるは三月三十日関参一六〇（筆者註：関東軍参謀文書160号）の如し」というのがあり、「戦力保持のためにも、ほかの患者輸送機を交付されたい」との要望が出されている。5月下旬には、「フェアチャイルド飛行機」を改造後に交付するための準備が行なわれている。この時期で該当し得るフェアチャイルド飛行機とは、FC-2くらいであろう。これによって愛国2号は昭和8年5月18

日に関東軍兵器部長名で廃兵器検定（現代の航空自衛隊で言えば、用途廃止）され、その後は奉天の千代田公園に展示されていたという。

学芸技術奨励金と国防献金

愛国１号、２号は、その当時でも存在していた「国防献金」ではなく、学芸技術奨励金から支出された。その理由となる、昭和６年12月の陸普5336号「国防献金品の件陸軍一般へ通牒」を見てみよう。

１、軍資献金に関しては、昭和６年陸満密325号通牒の通り、大蔵省主管収入として国庫に収納される

２、物品の寄付に関しては、陸軍限り之を受理し、大正11年陸達第５号陸軍学芸技術奨励寄付金品出納整理規定に準じ整理す

３、とくに兵器、被服、装具等の物品を指定し且つその製作または購入方を合わせ委託して之が寄付を申し出て金銭を差し出すものにありては、寄付者の便宜を計るため陸軍省内国防献品取扱委員に於いて金銭を保管し且つ寄付の取扱を代行す

４、前項の国防献品取扱委員は、帝国在郷軍人会に当る

ただし、この通達以降も取り扱いを誤ることが多かったらしく、翌年７年１月に改めて通達が出された。それによると、「国防献金」は以下である。

１、制式兵器、機材、被服、装具等の現品を陸軍に献納せんとするものの為、寄付者に代わり寄付の取り扱いをなす（下線は筆者）

２、寄付者は、寄付せんとする品目および員数を明らかにし、これに要する経費を添えて申し出ること

３、剰余を生じる場合、剰余金を学芸技術奨励寄付金として申し出させること

４、一個（機輌挺等）を購入に不足の金額を持って献品委員会に申出あっても取り扱い難きにつき、その如きは学芸技術奨励寄付金として申し出しめること

対して「学芸技術奨励寄付金」は、以下となった。

撮影日・場所不明の写真。P.85上の写真と比べて、愛国１号の垂直尾翼の「愛國號」標記が白くないことに注意。機首の旋回銃も外されている。

一．陸軍大臣官房にて取り扱い

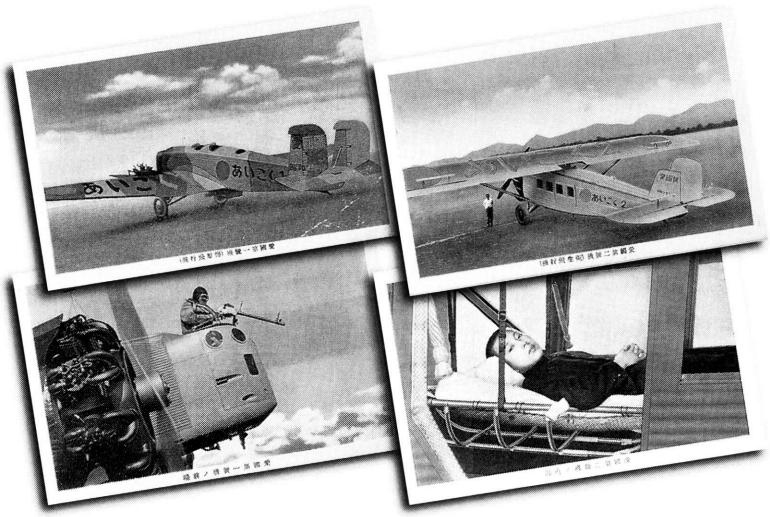
二．制式に非ざる新式兵器、機材、被服の購入およびこれにともなう所要の経費（下線は筆者）

つまり、両号は制式航空兵器でないK37とメールクールという機種故に、学芸技術奨励金からの支出となっているのである。昭和８年４月命名式の愛国81・82（ケレットK-3オートジャイロ）、愛国128・129「満俵」号（ユンカース160改造患者輸送機）も非制式機故に本奨励金からの支出となっている

もう一例、学芸技術奨励金からの愛国号がある。愛国130・131号がそれで、機種は「高速連絡機」。実機はキ15（後の九七司偵）で、その増加試作１号機と２号機である。このことは、九七司偵の制式化時の審査経過報告から分かる。

愛国号と絵葉書

いまほどメディアが発達していない当時、絵葉書は重要な視覚メディアであった。愛国号でも献納記念絵葉書が献納毎に作られており、２枚を１組として絵葉書袋／タトウが付いた１セットであった。この組み合せは、愛国6145「朱雀」号（昭和20年２月命名式）まで確認できるため、一貫していたと考えられる。加えて、初期のころでは、機体諸元を記したリーフレットが添えられていた。

愛国１号、２号の彩色による絵葉書を下に示す。実際の色とは異なっているだろうが、愛国１号の３色迷彩や愛国２号のコバルト色の感じが掴める。

面白いのは４枚のうち右下に示した、患者に模した人が寝ている「愛国２号の内部」である。愛国２号とあるがドア形状から、以前より陸軍が患者輸送機として使用していたユンカースJF-6が実態。軍は出だしから、誤ってしまったようだ。（つづく）